

第31回「東書教育賞」の審査を終えて

審査委員長

谷川彰英先生

第31回東書教育賞受賞の皆様おめでとうございます。心よりお慶び申し上げます。また関係者の皆様にもお祝い申し上げます。

この度の応募者は小学校151件、中学校80件の231件（うちICT 23件）と多数に及び、その中から厳しい審査の結果、皆様が教育賞を受賞されたということになります。教育実践を踏まえた教育論文をここまで書き上げた皆様のご努力に敬意を表します。

さて、今回の講評につきましては、審査委員長を務めた立場から、それぞれの受賞論文の概要を申し上げるとともに、私の視点からそれぞれの論文の優れた点及び特長を述べてみたいと考えております。

教育実践に限ったことではありませんが、人間が真剣に努力した実践には必ずそれなりの「キーワード」「キーセンテンス」が生み出されてきます。その「キーワード」「キーセンテンス」を抽出してお伝えすることによって、今回の受賞論文の特長を理解していただけるものと確信しております。以下、受賞論文に即してそのキーワードをお示ししてコメントしていきたいと思います。

I 小学校部門

○最優秀賞：愛知県碧南市立大浜小学校

金子てる子校長先生【戦争と平和を伝える子どもを育てる総合学習「艦内誌『不朽』」】

戦後70年が過ぎ、戦争体験者は高齢化して戦争体験を聞くことで戦争や平和を考えることが困難になっています。そういう状況の中で、本

実践は戦中に撃沈された伊号第29潜水艦の「艦内誌『不朽』」を復刻する作業を通じて当時潜水艦で戦った人々の思いに直に触れ、そこから戦争の悲惨さを考えさせたものです。これまでの平和学習では、体験者の話を聞くところから戦争の実態に迫っていくのがほとんどでしたが、それが次第に困難になってきている中で、このような新しいアプローチが示されたことに大きな意義があると言えます。具体的な作業としては、艦内誌のパソコンによる書き起こし、電子書籍化、復刻完成報告会の設定などのほか、乗員家族を招聘して話し合いを行っています。

学習前に「日本で戦争があったことは知らない。戦闘機に乗ってみたい」と語っていた児童が、学習後にこう書いています。

「戦争中、毎日死ぬ覚悟で生きていた。潜水艦に乗っていたような人たちがいなかったら、日本はどうなっていたのだろう。命を捨てて家族や日本を守ろうとしていた。命は一人に一つしかない」

キーワードは「命は一人に一つしかない」です。戦争と平和を考える際の視点となっています。

○優秀賞：茨城県つくば市教育委員会

柿沼宜夫教育長【21世紀の学びを変えるICTを活用した小中一貫教育のあり方】

「中1ギャップ」に象徴される6・3制の学校制度では解消できない教育の限界を、9年間連続した「学び」である4・3・2制の小中一貫校の導入によって克服しようとしたものです。その背景には、これまでの小学校の教員には「卒

業させてしまえばそれで終わり」といった風潮があったとされています。これは小中高の学校レベルのいずれにも当てはまる実態と言っているでしょう。

つくば市では9年間を通じて学ぶ「つくばスタイル科」を創設しました。これは総合的な学習の時間をはじめ、生活科・特別活動・道徳の一部を使って行うもので、環境・キャリア・歴史文化・防災・外国語を主体的にアクティブ・ラーニングを行う「21世紀型スキル」として習得するという意欲的なものです。特に、小中学校間の時間的・空間的距離を埋めるためのテレビ会議や電子掲示板などのICTを活用することで成果を上げています。

キーワードは「21世紀型スキル」です。

○優秀賞：島根県邑南町立羽須美中学校
保坂美江先生【「食の掲示板」を生かした給食指導・食育の推進】

食育を通して「健やかな心と身体の児童の育成」を追求した2年間の実践をまとめたものです。給食の献立とともに食材や食文化に関する情報、食事のマナーなどについて「食の掲示板」を設置し、給食での学びが児童の実生活に結びつくように工夫しています。また、給食時間に「食育タイム」を設定し、実践の中で「食」と「心」を結び、生涯にわたって健康で豊かな生活を創り上げる子どもの育成を目指しています。

6年生の児童が、こう書いています。

「今日の勉強で、給食センターの方は、いつも栄養バランスに気をつけながら作ってくださっていることを知りました。私は、ずっと何気なく給食を食べ、前までは残すこともありました。でも、今日で給食への気持ちが変わりました。赤色・黄色・緑色の栄養が全部入っている給食はすごいと思ったし、残さず食べようと思いました」

キーセンテンスは「今日で給食への気持ちが変わりました」です。授業力を感じさせる言葉です。

Ⅱ 中学校部門

○最優秀賞：福島県猪苗代町立東中学校
渡部真喜子先生【CAN-DOリストを活用した英語科授業の実践】

英語科における具体的な学習到達目標である「CAN-DOリスト」の作成・開発と授業での活用に重点を置いた研究です。「CAN-DOリスト」は、3か年の見通しをもった「全体リスト」とそれを細分化した「単元別リスト」で構成されていますが、特に、「単元別リスト」では、絵文字を入れたり「What more can you do?」という自由記入欄を設けたりして様々な工夫がされていることに特長があります。英語教育が直面している喫緊の課題に正面から取り組んだ研究で高く評価されました。

単元別の振り返りをCAN-DOリストを用いて行っていたところ、ある生徒がこう言ったといえます。

「先生、これCAN-DOリストどころじゃないですよ。感動リストですよ」

キーセンテンスは「CAN-DOリストは『感動リスト』」です。生徒の反応がよく見えます。

○優秀賞：宮城県白石市立東中学校
佐藤拓也先生【科学的に探究する力を育むための小中連携の在り方】

「科学的に探究する力」を育むために、小中学校理科の連携をどのように行っていけばいいのかを追求した研究です。小学校理科の学習で身につけた問題解決能力を中学校でどう生かしていくかを探っています。具体的には「比較する」「関係を考える」「条件に注目する」「原因を推測してみる」など、小学校で身につけてきた問題解決能力を生徒に再度意識させ、そのうえで理科的な能力を育むことが重要だと指摘しています。また中学校の教師が小学校で授業を行うなど、校種間での交流研修を行うなど意欲的に研究を進めていることが高く評価されます。

佐藤先生が小学校6学年で、動物の「呼吸のはたらき」について3時間の授業を行った後の

児童の感想です。

「最後の授業で結果をまとめてよく分かりました。考察でいろいろな気体をふくろに書いて、分かりやすく図に表しました。三日間ありがとうございました。来年東中でまたおもしろい発見を見せてください！」

キーセンテンスは、やはり「来年またおもしろい発見を見せてください！」でしょう。小中連携の中で成長する子どもの姿がよく見えてきます。

○優秀賞：神奈川県横浜市立神奈川中学校

藤原大樹先生、

横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校

大内広之先生・大矢周平先生【見通しと振り返りを重視した数学的活動の授業づくり】

「学習の見通しを立てたり、学習したことを振り返ったりする活動」を数学的活動に位置づけることの意義を、学習意欲の面、数学的な思考力・表現力の観点から検討した研究です。

「見通す・振り返る」学習活動を、その対象から「結果の見通し」「過程の見通し」「結果の振り返り」「過程の振り返り」の四つに区分し、それぞれその意味づけや価値づけについて具体的な実践の中で検討しています。「比例を用いて具体的な事象をとらえ説明する事例」（第1学年）「図形の性質の証明を読んで新たな性質を見いだす事例」（第2学年）「2点から等角である点の集合をかく作業を振り返り、円周角の定理の逆を見いだす事例」（第3学年）の三つの実践が報告されていますが、数学教育の長年の実績をベースにした研究で高く評価されます。

数学教育研究に凝縮された論文ですので、実践上のキーワードは特に示されてはいませんが、あえて言えば「見通しと振り返り」ということになるでしょう。

○特別賞：愛知県名古屋市立当知中学校

伊藤雄司先生【ガーナに賭けた青春】

ガーナ共和国の人々との交流から生まれた「ガーナについて知る・考える・行動する」という3年間にわたる活動が、生徒の自己有用感

や自尊感情を高め、他者のために進んで行動しようとする原動力となった実践をまとめたものです。

事前アンケートでは、「自分は自分」「他人は他人」と考える生徒が半数もいたということですが、「フェアトレードバザー大作戦」「街頭募金」「ドリームノートプロジェクト」など多彩な活動を通じてガーナとの交流を深める中で生徒が変容していく過程がよく見える素晴らしい実践です。論文の中にある次の文章が光っています。

「人は、他者から信頼されることで自信をもつことができる。自分にもできると感じれば、自分を好きだと感じるができる」

これがキーセンテンスです。

このように今回も素晴らしい教育研究論文が受賞されましたこと、改めてお祝い申し上げます。ただし、先生方へお願いしたいのは、教育研究というのは個人の名誉や栄誉のために行うものではなく、あくまでも日本のこれからの教育実践に還元されなければならないということです。教育学という学問が実践の学であるというのは、そのことを意味しています。

数年前のことですが、韓流ドラマをたまたま見ていたら、興味深い場面に遭遇しました。10歳にも至らない王子が様々な教育を受けていくなかで、師匠から「学問は何のためにするのか」という問いを出されたのです。これは難しい問いです。これまで数十年間学問をしてきた私にとっても、そう簡単には答えられない問いなのです。まして年端もいかない子どもなら、なおさらのことです。

ところが、その王子は見事にひと言で返したのです。

「学問は、人々に【分ける】ために行うものです」

「分ける」とはどういうことかという、たまたま自分は学問ができる立場にあり、多くの知識や能力を身につけることができている。そ

こで得た知識や能力は学問ができないでいる人々に「分ける」ことが必要である。その王子は、このように答えたのです。

私はこの返答を見て愕然としました。そのとおりなのです。本来の学問は、このように世のため人のために活用すべきものなのです。

皆さんにもそのようなことをお願いしたいと考えています。今回の栄えある受賞に甘んじる

ことなく、是非その成果を今後の学校教育の現場に還元していってほしい。我が国の教育界は目下、次期教育課程の改訂で様々な論議を呼んでいます、その改訂にとどまらず、その先を見通した教育実践の向上のために皆さんの成果を「分けて」いただけるようお願いして、私の講評といたします。

ICTに関わる論文の総評

赤堀侃司先生

ICTは普通の道具

ICT部門の審査をして思うことは、年々ICTが普通の道具になってきたという実感です。「ICTを使った授業」という、あえて冠をつけなくても、ICTを使った授業は実践されています。そのこと自体が、審査員の一人として嬉しい。道具が透明になったのです。毎年、応募論文を読んで思うことは、心に響く論文は、ICTの特性を活かしながら、子どもに、良心と誠意をもって指導する教師の姿が読み取れる論文です。今年も、そのようないくつかの優れた論文に出会いました。

学校改革という大仕事

茨城県つくば市教育長である柿沼宜夫先生の論文は、ひときわ輝いていました。本論文には、教師になって50年の歴史が語られていました。教育には、大きな壁がいつの時代にもあります。中でも、いじめ・不登校は、教育界に突き付けられた最大の難問ですが、その現象の一つとし

て、中1ギャップがあります。よく知られているように、小学生から中学生になったときに、いじめ・不登校が急増します。柿沼教育長が実践したことは、4-3-2制の小中一貫教育の実現でした。その学校改革の中で、ICTを活用しました。小中一貫教育には、施設一体型であれば併設型の学校もある。小学校と中学校の校舎が離れている併設型では、テレビ会議や電子黒板やネットワークが大活躍しました。

中学校の先生が、小学生に教科担任で授業をすることもあります、ICTを活用することで小学生に受け入れられました。この学校改革で、多くの先生が、学級担任と教科担任、部活動指導、職員会議の違いなど、多くの未知の経験をしました。たぶん、反論も多かったであろうと思います。小学校と中学校では、文化が違うからです。中1ギャップとは、小学校と中学校の文化の違いから生じると言ってもいいと思います。そのギャップを先生方自身が経験したのです。そこを、ICTという道具が支えたのです。

現在、つくば市では、14中学校区をすべて小中一貫教育として実施されています。

中でも、施設一体型の春日学園小中学校の教育実践は、めざましいものがあります。学力がきわめて高いだけでなく、一人の不登校の児童生徒もいないといえます。その春日学園小中学校は、最も先進的にICTを活用する学校として知られています。

市全体の学校改革、一つの学校の経営、一つの学級の経営など、規模は様々ですが、その経営、まして改革となれば並大抵ではありません。その大きな教育改革の実践に、拍手を送りたいと思います。

実践という重み

長野県の箕輪中学校の阿部知之先生の論文も、私たちの目を引くような優れた論文でした。阿部先生は、ICT支援員です。ICT支援員という立場上、多くの授業を見て、多くの先生方の相談に乗ってきました。その経験上、ICTは道具であり、本質は授業にあるという当たり前ですが、多くの授業実践から得た教訓は、そのとおりだという他者を説得させる重みがあります。

ICTを授業で使うには、いろいろな壁があります。その一つは、操作です。単に操作できるだけではなく、この場面という授業の瞬間と勝負しているので、その中で、ICTが生きもすれば死にもします。授業場面とICT操作を、うまく結びつけなければなりません。その研修は、どうしたらいいだろうか。阿部先生は、ミニ研修会を行っています。20分程度の小さな研修会ですが、この積み重ねが、先生方の意識を変えていったのです。ICT通信も発行しました。そして、ドリル学習、協働学習、教材呈示まで、幅広い場面で、授業実践を支え続けました。その結果、ICTが不足だから、無線環境がないからなどではなく、何をどのように子どもたちに見せたいか、活動させたいか、その良心と誠意がICTをうまく活用するのだ、というメッセージは素晴らしい教訓と言えます。

ICTと実物との融合

残念ながら今回は受賞を逃しましたが、富山大学人間発達科学部附属小学校の先生の、理科授業でのICT活用実践も示唆に富む論文でした。「コオロギは飛ばないのに、羽があるのはどうしてだろう」という疑問を、コオロギの観察を通して、子どもたちはもちました。虫メガネで見たがよく見えないので、タブレットで動画を撮影して、観察しました。そこで、羽がギザギザになっていることから、コオロギのきれいな鳴き声の秘密が、羽にあることを見出しました。それは、新しい発見でした。たぶん子どもたちは、このときの新鮮な驚きを、いつまでももち続けるだろうと思います。みごとな、ICTと実物との融合です。子どもの疑問を、ICTが支えるという役割が果たされています。そのような実践を導いた先生の力量に敬服しました。

その他、本書で紹介したい多くの論文がありました。ICTを使って、特別支援の子どもたちが生き生きと力を発揮した論文なども、印象に残っています。

次回もまた、多くの投稿を期待したいと思います。

審査委員の講評・所感

杉山吉茂先生

何かを「教える」というと、教えようとしている事柄を「言葉で説明する」「分かりやすく解説する」ことを思い浮かべる人が多いようです。そういう教育観に立っていると、教師は、子どもに教える程度の知識はもっているのだから、分かりやすい説明の仕方を学べばよいということになります。昔の師範学校はその考えに立っていましたが、今でも、その考えが広くも

たれているようです。大学院に進む教師も増えていますが、多くが教職大学院に進むといえます。教科教育は不必要という考えもあるといえます。教師が教えて、子どもが分かるという教育観ではそうなるでしょう。

私の専門は数学教育です。数学教育の専門家といえば、子どもに分かりやすい説明をいろいろ知っている人、効果的に練習させる方法を知っている専門家と思われるかもしれません。しかし、私は、子どもが数学の種を見つけ、数学に作り上げ、さらに発展させる態度と力を身につけ、自ら数学を学んでいける子どもを育てる数学教育をしたいと思っています。それができるためには、教科書に書かれていることを知っているだけでなく、人類が、何を求めて数学を作ってきたのかを知らなければなりませんし、数学を作るための問い、態度も知らなければなりません。それが子どもの身につくように配慮し、実際に子どもにそうさせなければなりません。

東書教育賞で表彰された論文の中に、平和のことを子ども自身が考えることができる題材を提供し、その題材を通して、平和についての深い理解を図ることを考えておられる論文がありました。子どもに深い理解をさせるためには、子どもでも考えられる具体例を与え、子どもに考えさせることが必要と考えられています。

そのほかの論文も同じです。子どもが自ら学んでいける題材や場を準備し、自ら学ばせることを通して、自ら学ぶ態度と力を育てようと試みられています。主体的に学ぶ学びを実現したいと考えておられます。それらの論文を参考にして、「子どもに発見、創造などできるわけがない」と開き直らない試みがたくさんできることを期待したいと思います。

審査委員の講評・所感

武内 清先生

簡単に感想と、受賞の方々にお祝いを申し上げます。

231件と多くの応募があった中から、厳正な審査の中から優れたものとして選ばれた論文には、共通点があると思います。

第一に、複雑な要因がはたらいっている教育の現場の中から、的確なテーマを見つけ出すセンスの良さがあります。そのセンスは、日頃の真摯な教育実践の中で、磨かれてきたものであることが伺われます。

第二にアクティブ・ラーニングが推奨される中で、児童生徒参加型の実践が多くなっています。

第三に、仮説の検証が、きちんとしたデータや実践によってなされているものが選ばれています。どんな教育方法でも教員が熱心にやれば、それに子どもは感化され変容します。子どもが変わったのは、教育方法のせいなのか、教員の熱心さのせいなのかの見きわめが大事です。そのためには、独立変数の変化が従属変数の変化の原因になっているのかどうかの科学的な検証（隠れた変数の統制等）が必要です。教育の世界は、理想や熱い思いだけが先走り、検証がおろそかになりがちなので、気をつけたいものです。

第四に、選ばれた論文の教育実践がとても優れたもので、実践者の高い教育力と教育技術が伺われます。その教育実践や方法を学ぶことから、日本の教育実践のレベルが向上します。

この選ばれた論文が公表され、日本全国の教育実践の模範となることにより、日本の教育の向上が確実に図られると思います。

このような論文を投稿された先生方に感謝す

るとともに、お祝いを申し上げます。

審査委員の講評・所感

壺内 明先生

東書教育賞を受賞された先生方、おめでとうございます。今回受賞されました先生方は、現行の学習指導要領の趣旨を踏まえ、今教育界の各分野で問題提起されている諸課題に率先垂範してチャレンジし、子どもたちのために多くの時間を費やして研究・研修を積み重ねられて多くの成果を上げられました。

私からは、中学校の部について感想を述べさせていただきます。

最優秀賞の福島県猪苗代町立東中学校の渡部真喜子先生、おめでとうございます。先生は、「CAN-DOリストを活用した英語科授業の実践」というテーマで、今、英語力向上を図る上で最も重要と言われている「CAN-DOリスト」の作成・開発に取り組まれました。実に3年間にわたって、改良に改良を重ねながら、生徒主体となったCAN-DOリストの開発を目指した素晴らしい実践研究であります。生徒と共に改良を加えたところにこの研究の大きな意味があります。生徒自身が自分が「できた」と、「できなかったこと」がより明確になるという、最高の「自己チェック」ができるまでに高めたことは、英語力向上を目指す観点から最も必要とされているものであります。まさに、「学習者主体」のCAN-DOリストであり、生徒からみると「感動リスト」であります。今後の英語力向上ばかりではなく、他の教科等でも極めて有効なツールになり、十分活用できることを示していただきました。

次に優秀賞の宮城県白石市立東中学校の佐藤

拓也先生、おめでとうございます。理科離れが叫ばれている今日、小学校で身に付けた問題解決能力を中学校で更に生かすにはどのような授業を展開すべきか、そしてまた、科学的に探究する力を育むための小中連携による理科授業の重要性を提起し、多くの学びの成果を上げられました。小学校での問題解決能力の育成では、観察・実験を行う前の課題把握での疑問のたせ方、課題提示の工夫、思考を深めるための支援のあり方や発問の仕方等について、実際に授業を実施して検証されました。さらに今後、小学校に出向いて授業及び情報交換を深める必要性と子どもたちの探求する能力の育成には、小中の連携協力体制を推進する中で、先生のご活躍を期待しています。

同じく、優秀賞の神奈川県横浜市立神奈川中学校の藤原大樹先生、横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校 大内広之先生、大矢周平先生、おめでとうございます。数学授業で、「見通す・振り返る」学習活動を数学的活動に効果的に位置付けることによって、学習意欲や数学的な思考力・表現力の向上を図り、多くの成果を上げられました。見通しを「結果の見通し」「過程の見通し」とし、振り返りを「結果の振り返り」「過程の振り返り」に整理し、学習意欲や数学的な思考力・表現力の育成に効果があることを実証しました。特に、三つの実践授業を通して、「見通す・振り返る」を意図的に設定した結果、生徒の授業評価アンケートから「これまでよりも証明への見方が変わった」とか「最も印象深かった」などといった数学的な思考力・表現力が身に付いてきたことが大きな収穫であります。どうぞ、今後とも継続して実践研究を続けられますよう期待しています。

特別賞の愛知県名古屋市立当知中学校の伊藤雄司先生、おめでとうございます。「ガーナに賭けた青春」というテーマで、教育困難校と言われている本校の立て直しを図るべき方法として、「ガーナについて知る・考える・行動する」という3年間の実践的な取り組みをして、生徒

一人一人の自尊感情を高め、他者のために進んで行動できる生徒の育成を目指した素晴らしい教育実践であります。自分を大切にするとともに、他人をも大切にできる人間づくりにガーナとの交流活動を実践して生徒の「心の成長」を目指した成果がこの実践研究論文から伝わってきました。この活動を是非、次に引き続いて実践していただくよう期待しております。

結びに、受賞された先生方の益々のご健勝とご発展を祈念して感想とさせていただきます。誠におめでとうございました。

審査委員の講評・所感

鳥飼玖美子先生

今年度も力作が集まりました。中でも印象に残っているのは、小学校では「戦争と平和を伝える子どもを育てる総合学習『艦内誌『不朽』』」（愛知県碧南市立大浜小学校校長 金子てる子さん）、中学校では「CAN-DOリストを活用した英語科授業の実践」（福島県猪苗代町立東中学校教諭 渡部真喜子さん）でした。

「艦内誌『不朽』」という、またとない真性教材はどこの学校でも入手できるわけではない、という意味では一般化の問題はありますが、導入時の理念を現場で生かすことが容易ではない「総合的な学習」の一つの事例となり得ること、記憶を風化させず次世代に継承する必要がある「戦争と平和」の問題を正面から扱っている論考として、意義あるものだと感じました。

英語の「CAN-DOリスト」というのは、最近、文科省が奨励しているものですが、もともとはヨーロッパ評議会が提唱している「複言語主義」（「すべての言語は平等であり、市民は母語のほかに二つの言語を習得することで相互理解をは

かり平和を構築する」という言語教育の理念）を具現化したCEFR(Common European Framework of Reference for Languages=ヨーロッパ言語共通参照枠)で使う能力記述文のことです。

CEFRは、言語学習者の能力を微細に記述するCan Do statementsを用い、言語を問わず共通の尺度で評価するもので、否定的な評価はせず、必ず「～ができる」という肯定的な評価をします。ヨーロッパ評議会が策定したCEFRは多くの言語で用意されていますが、これを日本で使うには学校現場に合わせた記述文を作らなければならず、これがなかなか難しいのです。

それを渡部論文は軽やかに越えて、ヨーロッパ評議会の参照枠にとらわれず、自分の授業で使えるようなCAN-DOリストを作成し、生徒の自己評価に使っています。「CAN-DOリストとはなんぞや」というところから出発し、学習者中心の視点に立って試行錯誤した末に、「自分で何ができるようになったか自分で分かる・理解する」ことに重点を置き、発信型コミュニケーション能力を記述するところまで練り上げたことの意味は大きいと思います。本論文が、他の中学校における英語CAN-DOリスト作成に示唆を与えることを願います。

注：ヨーロッパ評議会はCan Doと表記、文科省はCAN-DOと表記しています。

審査委員の講評・所感

東原義訓先生

受賞者の皆様、おめでとうございます。

私は、主にICT活用に関係する論文を担当して読ませていただいています。

ICTが授業で効果的に活用されるためには、

授業担当者の工夫や努力だけでなく、周りの支えが重要であると示されたことが、本年度受賞者の論文の特徴と感じました。

優秀賞を受賞された茨城県つくば市の柿沼教育長の論文は、市としてのビジョンを掲げることの重要性和市が一丸となって推進することが多くの先生による日々の実践につながることを示してくださいました。教育委員会のリーダーシップが小中一貫校でのICT活用に重要な意味をもつということです。

一方、奨励賞を受賞された長野県箕輪中学校の阿部さんはICT支援員を担当されている方です。どのようにして、校内の先生方を支え、ICT活用を日常的なものにしていったのかの貴重な実践を紹介されました。

前者は教育CIOとしての教育委員会の役割、後者はICT支援員としての役割が重要であることを明らかにした論文で、いずれもサポート体制が重要である点に共通点が見られます。

最近の審査で気になっていることがありますので、ここで触れておきたいと思います。論文投稿に関する倫理に関するものです。とても残念なことです、二重投稿が実際に見られる点です。応募の申込書に未発表であるか否かを記載する欄があります。未発表としながら、実際にはほかで発表されているケースです。インターネットの発展により、すぐにそれが確かめられる時代になったとも言えます。もう一つは、引用を明確にしていないものが見られることです。引用文献としての出典が明記されていませんし、引用箇所が自分の文章と明確に区別されることなく記述されているものが実際にありました。このような論文を投稿される方は、倫理の面でも、児童生徒に対する知的財産や著作権に関する教育の面でも問題があると言わざるを得ません。

東書教育賞では、以前、ICT活用部門という審査枠がありましたが、授業でのICT活用が普及し、特別なものではなくなってきたため、平成21年度からその部門が廃止されました。しか

し、情報モラルの実践や一人一台のタブレットPCの活用など、新たなICTの活用にも意義ある実践が見られるため、応募段階でICT活用に関係する論文には、ICT活用のチェック欄にチェックを付けていただくようになっています。

今後は、教科教育におけるICT活用に関する実践のほか、ICTを活用したアクティブ・ラーニング、情報活用能力の育成、プログラミングなどに関する実践論文が投稿されることも期待されます。

審査委員の講評・所感

三上裕三先生

本日は、第31回東書教育賞を受賞されました先生方に心よりお祝い申し上げます。私は、小学校部門を中心に感想を述べさせていただきます。小学校の応募数はほぼ昨年と同程度でしたが、中でも国語、外国語活動、道徳の応募が前年度に比べ多かった点が特徴的なことでした。

まず、最優秀賞を受賞されました愛知県碧南市立大浜小学校の金子てる子校長先生、おめでとうございます。小学生にとってはやや重いテーマと思われる「戦争と平和」を伝える総合学習を教育活動として構成し実践されました。学区内の民家で発見された旧日本海軍の潜水艇の乗員が編集した艦内誌「不朽」創刊号を教材化できないかという発想が素晴らしいことです。一般的には珍しい貴重な資料で終わるところです。戦争体験を直接聞く機会がほとんどない子どもたちに艦内誌「不朽」の復元を通して戦争と平和について考える学習を見事に成立させ、新聞やテレビ等でも報道され、大きな成果を上げられました。子どもの身近なところから発掘された素材を教材化できないかという着眼点、

そして子どもと教師が共に活動を通して学習を深めていこうとする経営的手腕に感心いたします。

次に、優秀賞を受賞されました島根県邑南町立羽須美中学校の保坂美江先生、おめでとうございます。先生は、現在中学校に勤務されていますが、前任校の小学校での実践をまとめられたものです。『『食の掲示板』を生かした給食指導・食育の推進』のテーマで全学年を対象に2年間の実践研究の成果を上げられました。食育の重要性が強調される中で、現実には朝食抜きの子ども、栄養バランスの欠ける食事、偏りのある食事等、現状の問題点は多いようです。

先生は、学校の教育目標と文部科学省の食育のねらいとを関連付けながら、年間計画のもとに毎月の「食の掲示板」の内容、提示の仕方など、子どもの関心を高める工夫をされました。子どもたちは毎月の掲示板を楽しみにしたことでしょう。掲示板だけでなく、給食時における「食育タイム」、野菜づくり体験、他教科との横断的指導、給食センター・家庭・地域との連携等、給食を通しての学びが縦・横にもつながり発展する実践的な内容です。全体を通して、先生の子どもたちに対する深い愛情、教育愛を感じさせる素晴らしい実践であると思います。

